

学 位 論 文 要 旨

氏 名 王 穎

題 目 中国における聴覚障害幼児の名詞の習得状況及び指導方法に関する研究

本研究では、聴覚障害幼児の名詞習得に焦点を当て、聴覚障害幼児の教育を行う教育機関で指導されている名詞およびそれらの名詞の指導方法、聴覚障害幼児の名詞の習得状況などについて調査し、名詞の指導方法が聴覚障害幼児の年齢によってどのように異なるか、習得した名詞の数や種類は年齢が上がるにつれてどのように変化するか、名詞の種類と指導方法の間にどのような関係があるかを分析し、聴覚障害幼児の名詞習得と指導方法の関連を検討し、名詞獲得を促すための効果的な語彙指導のあり方に関して示唆を得た。

本研究は、序論3章、本論5章及び結論の合計9つの章で構成されている。

序論第1章では、中国における聴覚障害児教育の歩みと政策、聴覚障害児の教育形態、聴覚障害幼児教育に関する研究の動向から聴覚障害児教育の現状を明らかにした。

序論第2章では、聴覚障害幼児に対する言語指導について、聴覚障害児の語彙の問題、聴覚障害幼児の語彙指導、言語指導の現状を述べた。先行研究から健聴児と比べながら、聴覚障害児の語彙の特徴および問題点が明らかになり、聴覚障害幼児の語彙指導における名詞の重要性および幼児の発達状況に合わせた指導方法の重要性が示唆された。

序論第3章では、序論第1章と第2章で述べた先行研究をまとめ、聴覚障害幼児の名詞獲得を促すための指導方法を検討する必要性を述べたうえで、本博士論文における研究の目的を以下のとおりである。①日本と中国における聴覚障害幼児の教育機関で実際に指導している名詞について調査し、指導する名詞の数と種類を分析する。②日本と中国における聴覚障害幼児に名詞を指導する際、使用されている指導方法について調査し、その指導方法が聴覚障害幼児の年齢によってどのように異なるかを分析する。③中国における聴覚障害幼児が習得した名詞について調査し、習得した名詞の数や種類が年齢が上がるにつれてどのように変化するか、名詞の種類と指導方法の間にどのような関係があるかを明らかにした。④中国で名詞指導の実践を行い、名詞獲得を促すための指導方法を検討する。

本論第1章では、まず中国における聴覚障害幼児の教育機関8ヶ所 51名の教員を対象に、実際に指導している名詞および名詞の種類について調査した。その結果、①51名中半数以上の教員が実際に指導している名詞441語を抽出し、具象語11種類(360語)と抽象語4種類(81語)の15種類に分類した。②調査した1,288語のうち、51名の教員全員が共通にして指導している名詞はわずか84語、75%以上の教員が指導している高頻度名詞は188語、50%以上の教員が指導している名詞は441語であり、8機関 51名の教員が共通に指導している語彙は少なかったことが明らかになった。次に、日本の聾学校幼稚部3校から収集した語彙表などの資料から指導する名詞については分析した結果、3校共通にして指導する名詞659語を抽出した。

本論第2章では、本論第1章で得られた441語の名詞に焦点を当て、中国の聴覚障害幼児の教育機関に在籍する聴覚障害幼児94名を調査対象とし、聴覚障害幼児の担当教師36名を調査回答者として質問紙調査を行った。その結果、①各年齢の平均理解語数および平均表出語数について、年齢が上がるにつれて指導語彙の獲得が進んでいる様子がうかがえた。②調査の対象とした名詞441語を15種類に分類して分析した結果、「施設・場所」「創作・学習」は4歳になって増加し、「食料・薬品」「動物」「乗り物」は5歳になって増加するなど、年齢が上がるにつれて語彙獲得に質的にも発達的な変化のあることが示された。③調査した名詞441語は具象名詞360語、抽象名詞81語であり、指導されている抽象名詞は少なかったことを明らかにした。

本論第3章では、中国の聴覚障害幼児の教育機関8ヶ所 51名の教員を対象に、本論第1章で得られた名詞441語を指導する際、どのような方法で指導しているのかを調査した結果、①指導方法については「絵・写真法」と「実物法」が名詞の全ての種類において最もよく使われていること。②一方、「動作法」「比較法」「役割法」はあまり使われていなかったが、名詞の種類に応じてそれぞれの指導方法の特性を活かした語彙指導が行われていることが示唆された。

本論第4章では、日本全国の聾学校幼稚部82校を対象に、本論第1章で得られた名詞659語がどのような方法で指導されているかを調査し、その指導方法が聴覚障害幼児の年齢によってどのように異なるかを分析した結果、①各年齢とも頻繁に使われている指導方法は「絵・写真法」と「実物法」であり、「比較法」と「役割法」は少ない。②「実物法」は子どもの年齢が上がるにつれ減少する傾向がみられ、「比較法」と「役割法」は増加傾向がみられた。

本論第5章では、中国における聴覚障害幼児の教育機関4ヶ所幼児72名を対象に、本論第3章と第4章で得られた中国(A群)と日本(B群)の指導方法で名詞指導の実践を行った結果、①各年齢の両群の事後テストの平均得点が事前より高くなり、両群の指導方法とも効果があった。②3歳児に対して、「実物法」と「絵・写真法」の指導効果が高かったが、5歳児に対しては指導効果も低かったことがわかった。

結論では、本研究の研究内容と結果を概括し、本研究の課題および限界6点について述べる。